小説 真慈真雄
表紙イラスト しなのゆら
誘惑
くのいち学園外伝
抜け忍さつき
試し読み版
二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『誘惑くのいち学園外伝　抜け忍さつき』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリーム文庫『誘惑くのいち学園』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただきますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

誘惑
くのいち学園外伝
抜け忍さつき
真慈真雄
表紙／しなのゆら
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

葉隠(はがくれ) 五月(さつき)

忍者養成学校の中等部生。幼い外見ながらプライドが高いが、本当は甘えたがりな性格。

不知火(しらぬい) 梓(あずさ)

五月の友達で、同じく忍者養成学校の生徒。底抜けに明るい元気少女。

サヤ・シュタウフェン

五月のクラスで委員長を務める、ドイツ出身の優等生。日本について偏った知識を持つ大和撫子。

不知火(しらぬい) 直樹(なおき)

忍者養成学校の元教育実習生。ごく普通の青年。

放課後の特別教室。大きく傾いた夕陽が、がらんとした教室を赤く染め上げている。

「ちょ、ちょっと……目ぐらい閉じなさいよ」

「え、そう？　あたしは五月ちゃんの顔見ながらのほうが、好きなんだけどな」

夕暮れの教室で向かい合う、ふたつの人影。どちらも丈の短い忍者装束を着た、くノ一風の少女だ。

顔を少し赤らめているのは、小柄な少女。長い黒髪を無造作に伸ばし、片目が前髪に隠れている。少し神秘的な美貌をした、気の強そうな女の子だ。触れたら壊れてしまいそうなほどに可憐で、華奢な身体つきをしていた。余分な贅肉は全くないが、胸のほうも全くない。ほっそりとした美脚に、オーバーニーソックスがよく似合っていた。名前を、葉隠五月という。

首を傾げながら不思議そうな顔をしているのは、不知火梓。亜麻色のショートカットがよく似合う、素直で優しそうな顔をしている。この年頃の少女特有の、すらりとした健康的な肢体をしていた。背は五月より、少し高い。胸も腰も発育途上だが、なかなかプロポーションは良かった。

五月と梓は忍者養成学校の中等部に在籍している、くノ一見習いだった。先日まで五月は梓を一方的に敵視していたのだが、教育実習生・不知火直樹のおかげで和解。今度は直樹をめぐる恋のライバル同士となってしまったが、意外と仲良くしている。

最初から読む
こちらスタート!

今日もこうして、二人は密会を重ねていた。想い人の青年が学院を去った後、切なく火照る身体を、互いに慰め合っているのだ。
「私の顔なんか見ても、しょうがないじゃない」
「そんなことないよ。五月ちゃん、とっても可愛いんだもん。女の子同士なのに、ドキドキしちゃうよ。ほら」
真面目な口調で、亜麻色の髪の少女は、五月の手を自分の胸に導いた。彼女の言葉通り、梓の胸はとくとくと高鳴っている。
「ば、ばか……。そういう口説き文句は、直樹に言いなさいよ」
親友のストレートな愛情表現に、少し照れてしまう貧乳くノ一。梓の裏表のない性格はとても好きなのだが、屈折した性格の五月には、親友の無垢な笑顔が眩しい。
二人は無言で見つめ合うと、どちらからともなく抱き合う。互いの手を腰に回すと、ごく自然に唇を重ねた。
「ん……ん、う……」
「んぅ……」
薄く唇を開くと、少女忍者たちは舌を絡め合う。誰もいない教室に、唾液の音がやけに大きく響いた。目を閉じて、同性の舌技にうっとりと酔いしれる五月。梓は間近で級友の顔を見つめつつ、目を細めてキスを愉しむ。

ちゅっ、ちゅうっ……ちゅぱっ、ぴちゃっ。たっぷりと唾液を絡めて、くノ一少女たちは同性同士の甘い接吻を味わった。次第に興奮してきたのか、二人の手が、互いの身体をまさぐり始める。

やがて、お気楽くノ一はキスを少しずつずらし、五月の顎から首筋へと唇を這わせていく。同時に舌を蠢かし、舌端で舐めくすぐるのも忘れない。

「ふ……あぁ……っ！」

敏感なちびっこ忍者は、それだけで切なげな喘ぎを漏らしてしまった。優しい親友のキスは、ちょっとくすぐったく、そして温かい。心がいっぱいに満たされる感じがして、目尻に涙が浮かんでしまう。

そんな五月の反応に気を良くしたのか、梓は腰を屈めた。薄い胸から細い腰、そしてしなやかな太ももへと、友人の身体を確かめるように撫でていく。着物の裾をそっとめくると、可愛らしいコットンのパンティが露わになった。

「あは、可愛い♪」

「や、やだ、そんなにまじまじ見な……あふっ⁉」

顔を真っ赤にして恥じらった貧乳くノ一だったが、パンティの割れ目をつつかれて甘い声を漏らしてしまう。子供用下着の股間は、淫らな汁でねっとりと濡れていた。失禁したように、粘液の染みが広がっている。

「五月ちゃんのここ、とってもいい匂い……」
甘酸っぱい愛液の匂いを鼻腔いっぱいに嗅いでから、梓は五月の秘裂を布地越しに撫でた。ぬちょりという卑猥な音と共に、小さなくノ一がのけぞる。
「ひゃうっ！」
同性の手慣れた指遣いに、思わず腰が震える五月。お気楽くノ一の指は、そのままパンティを脱がしてしまう。ちびっこ忍者の未熟な割れ目が、露わになった。
淫水でぬらぬらと光っているのは、筋状の秘裂だ。まだ花弁もはみ出しておらず、恥毛の茂みもない。つるりとした滑らかな大陰唇は、白い肌と同じ色をしていた。
「きれい……」
うっとりと目を細めて呟くと、梓はためらうことなく五月のスリットを舐め上げた。ピンクの舌端が、淡い色合いの秘唇を撫でる。愛液のぬめりを舐め清めると、膣口から新たな花蜜が溢れ出してきた。
「やっ……んふぁっ……そ、そんなとこ、舐め……ひあぁっ！」
長い髪を波打たせて、小柄なくノ一が身悶えする。親友の大胆な奉仕を制止しようと、梓の肩に手を置いているが、彼女のクンニは止まらない。
お気楽忍者は口元をべたべたにして、愛液まみれの顔を上げた。
「んっ、あむっ、んふぅっ……五月ちゃんの愛液、甘くて美味しいね。これってやっぱり、

忍術なの？　教えてくれないと……」
綺麗な歯並びをした少女の歯が、級友の陰核を探り当てる。ピンク色のクリトリスに、白い歯が添えられた。
甘噛みに弱い五月は、慌てて正直に秘密を告白する。
「そっ、そうよっ！　その……毎日特別な薬を飲んで、体臭や体液に催淫作用を……あっ、ちょっ、な、何してるの⁉　正直に言ったんだか……ひゃうぅんっ！」
間髪入れず陰核を甘噛みされて、黒髪のくノ一はビクビクと激しく震えた。強烈すぎる快感に腰を支配され、脚の力が抜けそうになる。
梓の白い歯が、まだ幼い五月のクリトリスを弄んでいた。そっと噛んで、剥き出しになった肉の珠を舌端で磨いてやる。つるりとした粘膜の粒を、ざらつく舌が擦り上げた。
「きゃふうぅっ！　ひっ、あぁぁっ！　やっ、やめて梓っ！　いやぁぁっ！」
「教えてくれた、お礼だよ。こう……ほふはへふの、ふひはほへ？」
陰唇に唇を密着させ、わざと声を出してみせる短髪のくノ一。噛まれるのが好きな親友のために、花弁をかぷかぷと甘噛みしてやる。
「ひぁぁっ！　やめっ、やめてぇっ！　くふうううぅぅっ！」
びくんびくんと細い肢体が震え、次の瞬間に一気に脱力する。どうやら絶頂に達してしまったらしい。重さを全く感じさせない華奢な女体が、梓の肩にもたれかかってきた。

「五月さん、性交の最中でも戦えるようにしておかないと、くノ一の務めは果たせませんよ？」

優等生的な態度で忠告しつつ、サヤが音もなくベッドに舞い降りる。中等部二年にしては発育した身体を持つ彼女だが、ベッドは揺れもしなかった。

五月もドイツ少女が強敵なのは熟知しており、慌てて立ち上がろうとする。

「くっ！　勝負よ、サ……ひぅっ！　はぁんっ！　ちょっ、やだぁっ！　きゃぅぅっ！」

だが彼女の膣は貪欲にペニスを咥え込んでおり、抜こうにも抜けない。おまけに腰がふらついていて、身構えることすらできなかった。

手にした棒手裏剣を取り落とし、ガクガクと震える五月。抜こうと身動きすると、その刺激でますます膣が締めつけを増す。快楽の無限回廊に落ち込んで、黒髪の忍者娘は甘い悲鳴を上げ続けていた。

サヤは余裕たっぷりに、手裏剣を奪い取る。それからそれを懐にしまうと、五月の細い顎を手に取った。顔を上げさせると、級友の濡れた唇に自身の唇を近づける。

ちゅっ。甘いキスが、五月の全身から力を奪い取ってしまった。立ち上がろうとしていたちびっこくノ一は、そのまま直樹の腰に尻餅をついてしまう。サヤと五月は、しばらくの間、情熱的な接吻を交わした。金髪娘の舌端が黒髪娘の唇を割り、その彼女の唾液をすすり飲む。同時にサヤは五月の薄い胸を撫で回し、襟の内側に手を滑り込ませていた。

えっちシーン試読ここからスタート！

「ん……んふぅ……んんっ……」
「んむぅっ！　んっ……んふぅぅっ！　んんぅっ……！」
やがて名残惜しげに、巨乳くノ一が唇を離す。その頃にはすっかり、ちびっこくノ一の表情は快楽にとろけていた。とろんと焦点の合わない瞳が、ぼんやりとサヤの笑顔を見上げている。
「どう……して……？」
「ふふっ。不知火先生に会いたかった気持ち、私もよくわかりますよ。だから今すぐ、連れて帰ったりはしません。たっぷり愉しんでからでも、誰も文句は言いませんよ」
（この子も変わったな……）
頭上で繰り広げられる、少し同性愛的な友情。それを見ながら、青年はサヤの変化を感じていた。昔はもっと堅苦しい優等生だった気がするが、どうやら彼女も人間的に成長しているようだ。
くノ一委員長は、艶やかな笑みを教育実習生に向ける。
「ね、先生。五月さんと先生が繋がっているところ、舐めてあげたいんです。少し体位を変えていただけますか？」
「ん、ああ」
直樹はうなずくと、身体を起こした。腰の上には五月がまたがっているが、彼女の体重

など羽毛も同然だ。挿入したまま、軽々と抱え上げる。ちびっこくノ一の身体を一八〇度回転させると、膣内でペニスも半回転した。熱い襞がざらりと幹を舐め回し、それだけで男根がビクビクと痙攣する。

ベッドの端に腰を下ろし、青年は騎乗位から背面座位へと体位を変えた。直樹の胸板に身体を預けて、五月はぐったりと脱力している。可憐な胸が激しく上下し、熱く濡れた息を切なげに吐き出していた。

「これでいいかな？」

「そうですね……あ、こうしちゃいましょう。ふふふっ♪」

サヤは楽しげに笑いながら、青年の膝元にひざまずいた。両手で五月の太ももを押すと、親友の脚を大きく広げさせる。そのままM字開脚させてしまった。

「五月さんのエッチなところが、丸見えになっていますよ。とても綺麗で、そしてイヤらしいです」

金髪くノ一の言う通り、幼い秘裂に太い男根が呑み込まれている光景は、ひどく背徳的で卑猥だった。

ぱっくりとスリットが開かれ、小さな膣口いっぱいに肉棒が押し入っている。締めつけられた幹は白く鬱血し、結合部からは透明なシロップが際限なく染み出していた。ぷっくりと充血したクリトリスが、少女の興奮を雄弁に物語っている。

「や、やだぁ……恥ずかしい……」
淫欲に濁った瞳に、羞恥の表情が浮かぶ。だが挿入の快感で緩みきった脚は、まるで力が入らない。広げられた脚を、閉じることさえできなかった。
サヤは結合部に顔を近づけると、男性器と女性器の匂いを豊かな胸いっぱいに吸い込む。ほんのりと頬を染めながら、優等生くノ一は淫らな笑みを浮かべた。
「美味しそうですね。こんなエッチなペニスとヴァギナは……食べてしまいましょう」
ちゅっ！　大胆な口づけが、結合部を襲う。と同時に熱く濡れた舌が、逸物を咥え込んだままの秘唇を舐め上げた。
「うおぉっ⁉」
「ひあぁっ！」
青年と黒髪の少女が、同時に悲鳴を上げる。快感に襲われた五月の身体が、直樹の腕の中でビクンと跳ねた。
ちゅっ、ちゅうっ！　ねちょっ……ねろねろっ！　ドイツ娘の舌が、結合部に入り込んでくる。襞と肉棒の隙間に舌を差し込むと、サヤは唾液まみれの舌端で蜜襞と幹を舐め回した。掻き回すような動きが、収縮する膣内に新たなうねりを生み出す。
「サ、サヤ……激しすぎる……うぅぉっ！」
教え子の幼い蜜壺に挿入しつつ、同時に別の教え子から舌で奉仕される。そんな背徳の

戯れに、直樹は激しく胸をときめかせた。腰が溶けてしまいそうなほど、熱く心地良い。ふと気づいたときには、勝手に腰が抽送を開始していた。

ちゅっ、ぱちゅんっ、ちゅぷっ、にゅぷんっ！　ぬかるむ肉襞を突き上げながら、怒張が激しいピストン運動を繰り返す。溢れる愛液がペニスで押し出され、飛沫となって結合部から飛び散った。

透明な蜜の珠は、サヤの顔や金髪にも降り注ぐ。だが彼女は気に留める様子もなく、男根と花弁に奉仕する。巧みな舌遣いで級友と想い人を酔わせつつ、唇で淫水とカウパー液をすすっていた。白い喉がコクコクと動き、淫らな汁を飲み干していく。

（い、いかん！　射精したばかりなのに、もう……！）

膣襞と口唇の強烈な責めを受けて、早くも射精の衝動が渦巻き始める。括約筋に力を入れて何とか踏み留まろうとするが、それを巨乳くノ一が邪魔した。直樹の陰嚢を掌中に収めると、白い指で優しく甘く揉みしだく。玉袋の中で逃げ回る精巣を、サヤは柔らかく指先で撫でていた。

「んっ、ぷはぁっ……。いかがですか、先生？　こうされると、スペルマがにじみ出してくるでしょう？」

「お、お前な……うおぉっ!?」

指先だけでなく、今度は舌全体を使って、金髪委員長が陰嚢を舐め回してきた。ひんや

りとした肉の袋を、熱い舌がねっとりと濡らしていく。腰がフワッと浮くような、妖しい快楽が青年を襲った。

一方、五月のほうはすっかり肉欲の虜になっていた。直樹の胸に頭を預けながら、腰だけをひくひくと蠢かせている。ピストン運動に合わせるように小さな尻が打ち付けられ、彼女の膣には入りきらない剛直を根元まで受け容れていた。

「うっ、くふぅあっ！　ひぁぅっ！　ふ、ふとぃ……ふといのっ！　せんせいの、太すぎるよぉっ！　ひくうぅっ！」

全身汗まみれになりながら、ちびっこ忍者は甘ったるい嬌声を吐き出す。日頃の虚勢が完全に剥がれ落ちて、五月の甘えん坊な性格が露わになっていた。

つんと澄ましたクールな美貌が、今はあどけない笑みで彩られている。だが同時に瞳は劣情で潤み、唇からは涎を垂らしていた。興奮で耳まで赤くなり、朱に染まった頬には黒髪が汗で貼りついている。

「ひはぁっ、ひぃんっ！　も、もっとぉ……もっと奥までぇっ！　私の子宮に、オチンチン入れてぇっ！　くふぅっ！　ふあぁっ！」

髪を振り乱しながら、とろけるような美声でおねだりをする五月。彼女の言葉通り、亀頭を叩く子宮口が、にゅむにゅむと吸いついてくる。

過去にも同じプレイを経験したことのある直樹は、思いきって教え子の腰をつかんだ。

くびれた細い腰を引き寄せると、力いっぱい腰を突き上げる。
ぐぬぅっ……ぬぷんっ！
「ひあああぁっ！」
子宮口を怒張が貫いた瞬間、ちびっこくノ一が澄んだ絶叫をほとばしらせた。それと前後して、亀頭に子宮内壁の感触が伝わってくる。襞のない、つるりとした触感。だが少女の胎内は、ペニスが灼けつくほどに熱い。おまけに子宮口と膣が、別々に幹を締め上げてくる。
子宮口はひくつきながら、カリのくびれを締めつけてきた。一方の膣は複雑にうねりながら、微細な襞で幹を擦り上げる。
（こ、こんなにちっちゃいのに……なんてエロい身体してるんだっ！）
訓練されたくノ一の蜜壺を味わいながら、青年は射精をこらえるのに必死だった。五月の子宮は激しく吸いついてきて、逸物の尿道を空にしてしまう。おまけに膣壁が根元から先端へと波打ちながら締めつけてきて、肉棒の中に溜まったカウパー液を絞り出そうとする。どうやらちびっこくノ一は、恋人の精液が欲しくて仕方ないらしい。
五月は腰をくねらせて男根を堪能しながら、淫蕩な笑みを満面に浮かべていた。金髪くノ一に秘裂を舐めくすぐられながら、黒髪の忍者娘はかすれた声で叫ぶ。
「せっ、せんせえっ！　ひっ、はうぅっ！　わ、私っ、『もう大丈夫』だからっ！……な、

中にっ、子宮に出してえぇっ！　きゃうぅっ！　せ、せいえきっ、注いでえぇっ！」
　青年は、ちびっこ忍者の「もう大丈夫」という言葉に、一瞬だけ妙な疑念を感じた。だがすぐに、射精の予兆が疑念を洗い流してしまう。どのみちもう、後戻りはできない。どくどくと激しい脈動がペニスを震わせ、身体の奥から熱い塊がこみ上げてくる。
「ぐっ、でっ……出るっ！　出すぞ、さつきいぃっ！」
　本能の赴くまま、直樹は子宮の奥まで五月を貫いた。悶える教え子を抱きしめながら、ほとんど同時に青年と少女は絶頂に達する。
「や、やけちゃうっ！　くふぅっ！　せっ、せんせいのオチンチンで、おなか灼けちゃうぅっ!!　ひぐぅっ！　ひっ、ひあああああぁ――っ!!」
「うっ、締まるっ!?　うっ、くううぅっ!!」
　びゅうぅっ!!　びゅるっ、びゅびゅうぅ――っ!!　びゅくっ、びゅくびゅるんっ!!
　サヤに揉みしだかれて陰嚢がグッとせり上がり、多量のザーメンをペニスに送り込んだ。尿道に注ぎ込まれた白濁は、五月の胎内で爆発する。怒濤の勢いで子種汁が噴き出し、少女忍者の胎内を白く染め上げた。
（な、なんかさっき言ってたけど……あれって……）
　直樹の心に引っかかるものがあったが、それもすぐにエクスタシーの彼方へと消え去っていく。未熟な子宮に精液を直に注ぎ込むのは、途方もない快感だった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/